

王であるキリスト

2016. 11. 20

ルカ 23・35-43

今年の教会の暦、典礼暦も最終の主日を迎えました。来週の日曜日11月27日には待降節を迎え、心も新たに、主とともに歩む旅が続きます。

今日の年間最終主日を、教会は「王であるキリスト」の祭日として祝います。「王であるキリスト」という呼称は、現代人であるわたしたちには時代錯誤のように感じられてピンと来ないという思いをお持ちの方もおられるかもしれませんが、一年の最後の主日を王であるキリストの祭日として祝うことには、わたしたちの信仰にとって根幹に関わる大切な意味があるので、教会はこの古めかしい看板を塗り替えるわけにはいかないのです。

「王であるキリスト」という呼称に違和感を感じる時、思い出さなくてはならないのは、今日の第一朗読で聞いたダビデのことです。今日の第一朗読のサムエル記下5章では、イスラエルの全部族が主の御前でダビデと契約を結び忠誠を誓って、ダビデに油を注ぎ、ダビデをイスラエルの王として迎えたことが語られています。ダビデはこれ以前にまだ少年であった頃、主なる神からの示しを受けたサムエルによって、故郷のベツレヘムで油を注がれ、メシア・王となる使命を授けられていたのです。(サムエル記上16・13)今日の第一朗読は、そのダビデが、あらためて神の民全員の前で油注がれて王として迎えられたことを語っているのです。このダビデの例に見られるように、イスラエルの民の王として選ばれた人に油が注がれるという儀式には特別な意味が込められていました。その場合の油は神の霊のシンボルを意味し、油注がれた人はそれによって神の霊の力に満たされ、その神の力によって、神から与えられた王としての使命を担うものとされたのです。そのように油注がれて王とされた人のことを、旧約聖書ではメシアと呼んでいます。メシアということばは、王として油注がれた人のことを指す呼び名なのです。

このことは、その後の聖書の民の「王理解」にとって決定的な重要性を持つこととなりました。メシアとしての王に神の霊によって与えられる使命は、一言で言うなら、この世界に神の義を実現するということです。旧約聖書の全体の流れの中で見るなら、それは、主なる神がご自身にかけて誓われ、ご自分のものとされた神の民を守り導き、神の義と公正をもって彼らの間を裁き、貧しく見捨てられた者たちの権利を守るということです。バビロニア帝国によって

歴史上のダビデ王朝が崩壊した後も、イザヤをはじめとする預言者たちは、主なる神がダビデと交わされた契約（サムエル記下7・16）に思いを寄せ、ダビデの子孫として主なる神が遣わしてくださる「メシア」への希望を民の中に燃え立たせようとしたのでした。

新約聖書の巻頭を飾るマタイ福音書の第一章には、神の民の始祖となったアブラハムに始まり、ダビデ王を経て、イエス・キリストにいたる系図が掲げられています。マタイ福音書がこの系図をもってわたしたちに告げようとしていることは、イエスはダビデの子と呼ばれ、ダビデの故郷ベツレヘムで生まれ、メシア預言の実現者「インマヌエル」としてわたしたちの世界に来られた救い主であるということです。

終末の福音が響く年間の最後の日々の締めくくりとして、「王であるキリスト」の祭日を祝うというのは、過ぎ行く時の流れの中でわたしたちが信じている、「イエスはキリスト・メシア・わたしたち全ての者の王として、わたしたちの救い主」であるということが、この世のあらゆる営みの彼方に、神の右の座に着いておられるイエス・キリストによって決定的に明らかにされることへの信仰に基づく希望を表明し、そのような希望が与えられていることへの感謝をささげるためです。

わたしたちのために十字架につけられ、死んで葬られ、復活して、父なる神の右の座につかれたわたしたちのメシア・王・救い主・イエス・キリストが全てを凌駕するその力をもって、今はまだ苦しみのさなかにあるわたしたち全ての者を決定的に救い上げてくださる日を待ち望みたいと思います。

そのためにも、今日の福音が語る、イエスとともに十字架につけられたあの盗賊のように、わたしたちの側に、わたしたちのために、わたしたちと同じように十字架につけられているイエスの愛に目を向けることが出来たらと思います。

ユダヤ人の王と記された捨て札のついた十字架につけられて死んでゆかれるイエスは、側に共に十字架につけられあの人に向かって、その最後の願いを聞き入れてくださり、「あなたは今日わたしとともに楽園にいる」と言ってくださるのです。

今日わたしたちが祝う王であるキリストは、あの十字架のときのように、今もわたしたちの側にいてくださり、苦しみの底からあの盗賊が口にした、わたしたちの王、メシア、救い主、イエス・キリストへの信仰のことばがわたしたちの口からも溢れ出ることを待っていてくださるのです。

今日わたしたちが祝う王であるキリストは、「ユダヤ人の王」と書かれた十字架につけられ、ともに十字架の架けられた者の願いを携えて神の右の座に着かれた、全ての者のメシア救い主である王です。そのような全ての者の救い主、王であるキリストへの信仰を新たにして、この一年の最後の主日のミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高